

「亀井の水」 ～中世、奥州街道の癒しの場～

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

江戸時代、宇都宮の人々に親しまれた名所として「七木・七水・八河原」があった。その七水の一つに、古くから旅人の喉を潤した名泉「亀井の水」がある。現在、七木・七水・八河原の多くは、その跡形は失われ、場所さえも分からなくなってしまう。そうした中、亀井の水は、コンクリート製の池となり清水も湧き出なくなってしまうが、「亀井の水」と刻んだ標柱が建てられ、泉の存在を偲ぶことができる。

亀井の水が、今でも宇都宮市民に親しまれているのは、泉の名前の由来となった源義経の家来であり、静御前のお供の亀井六郎にまつわる話が伝えられているからであろう。亀井の水の伝説の概要は次の通りである。

「源平合戦の後、將軍頼朝と不和になった源義経は、武蔵坊弁慶等の家来を伴い、奥州平泉の藤原氏を頼つ

て落ちて行った。後を追う側室の静御前は、宇都宮に来ると足取りが重くなり、喉の渴きを訴えるようになってきた。家来の亀井六郎が、一心に祈りながら持っていた槍で地面を突き刺すと清らかな水が湧き出した。お陰で静御前は喉の渴きを癒し、再び奥州平泉に向かって出発することができた」という話であり、以後、その泉は「亀井の水」と呼ばれるようになったということである。

亀井の水は、もともと自然の湧水である。宇都宮の中心街の地形は、田川の両側に広がる低地、市役所等が乗る台地、裁判所等が乗るより高い台地からなる。こうした台地と台地の境は崖となっており、崖の下は地下水が湧き出しやすい。亀井の水は台地と台地の境の崖下に湧き出した泉の一つである。

そんな変哲もないただの泉が、その名を亀井六郎に由来するという伝説

まで生まれ、宇都宮の名所になったのは、ここがかつて奥州街道に沿う所であったからであろう。奥州街道は、古代、中世においては、京の都と奥州とを結ぶ付ける道ばかりでなく、宇都宮辺りでは鎌倉と結びつける重要な交通路でもあり、別名鎌倉街道とも呼ばれた。

もともと奥州街道は、南から来ると不動前付近で右折し、現在の不動前郵便局付近から常念寺、ならびに亀井の水、さらには旭中学校付近へと宇都宮城の南東の縁をたどり、上河原方面に抜けた。それを江戸時代宇都宮城主となった本多正純が、城の守り等の点から城から遠ざげ不動前より左折し、南新町、材木町、伝馬町、池上町、鉄砲町、曲師町、日野町等を経て上河原に至るように付け替えられたのである。

亀井の水の存在は、古くから知られ貞享五(一六八八)年頃に打記された『下野風土記』にも「古多橋ノワキナリ、往古ヨリ名水也ト云伝タリ」とある。古多橋とは、古代・中世に奥州街道筋に設けられた重要な宿駅である。

古多橋駅の近くにあった亀井の水の存在は、奥州街道を行き交う旅人にとって重要であり、多くの旅人がこの亀井の水で喉の渴きを癒やしたに相違ない。そうした中、あえて静御前に関わる話が、この泉の名の由来となったのは、奥州へ落ちのびた義経人気にあやかったものであろうか。



鶴田高お神社
高麗と刻まれている鳥居

